

ダンジョンに灰色の大狼シフがいるのは間違っているだろうか？

ワンワンお！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数千にも及ぶ死闘の果てに灰色の大狼シフはその生涯を終えたはずだつたが…

第
4
話
第
3
話
第
2
話
第
1
話

目

次

15 11 7 1

第1話

我輩は狼である、名は我が友

狼騎士アルトリウスが付けてくれた。

シフという、意味は灰色らしい。

なんとも彼らしい素つ氣無い名前だと王の刃キアランは笑つて言つていた。

我輩は未熟ながら剣士として修行し、友の一助として大王にお仕えしておつた。

しかし我輩はウーラシールが闇に呑まれた時には無力であり、通りすがりの“あの不死人”的助けを借りて共に汚れたマヌスを倒してからは我が友の墓守として生涯を過ごしていた。

皮肉なことに、再び“あの不死人”と出会つたのは更にあれからくるか後の世

敵としてであつた。

あれから多くの事があつた、我輩は元より神代の狼なれば不死人ほどでなくとも長生きする

が、疲れた。

不死が何故地獄なのかよくわかる。

アノール・ロンドより多くの神々は去り、火の陰りは増す一方であつた。

地には哀れにもソウルを失い、理性も誇りも失つた亡者が溢れかえる。

全ては終わる、火は陰り死者すら闇に呑まれていくのだ。

今まだ、あの不死人と死闘によつて無力にも闇に呑まれるのではなく、

一人の戦士として命を終わらせることできたことを感謝しよう。

「友よ…」のような事になつてすまない。

もしもまだ神々の恩寵があるのなら

お前のソウルを放とう、因果が巡つていつの日か再びお前が生を得る事ができるように」

かの不死人が何かを呟いている、哀れな者よ。

我輩は漸くこれで終われる、だがお前はこれからずっと失い続けるのだ。

死ぬことも逃げ出することも許されない。

太陽すら燃え尽き、全ての星すら輝きを失つても
未来永劫に生き続けなければならぬ、神々すら恐れる地獄。

不死人よ、お前がいつの日か死ねることを祈つていいぞ。

⋮

恐らくは数万か数億年後

かつて、世界に災いをもたらすモンスター達を生み出す大穴があつた。

それを塞いだのがバベルの塔、その周辺に出来上がつたのがオラリオの町である。

ダンジョン 18階層

んむ？ ここはどこだ？ なんとも言えない狭苦しいところに何故いるのだ？

確かに我輩は死んだ筈だが？

何故、我輩は今土の中に埋まっているのだ？

確かに死んだと思われるが、だからと言つて生きたまま埋葬されるとは思わなんだ。

きっと埋葬人の代金をケチつたに違いない。

岩から身をよじつて出てみると周りを見渡す、どこなのだ？

あたりは火一つないのに不思議に明るい。

体を見てみると、自慢の毛並みは傷一つないし大切な剣もそのままである。

おかしい、まさか我輩も不死人ならぬ不死狼になってしまったのだろうか？

だから墓から更に下に這い出て最初の死者ニト殿の領域に来てしまったのか？

だとしたらご挨拶を欠かすわけにはいかぬが、さて方向も分からぬのでは：

と、一人物思いに沈んでいるとなんと、奇怪な形の異形が壁から出てきた。

数にして50程、デーモンが混沌の炎より生まれるというのは有名な話だが、まさか壁からポコポコ生まれるなどとは…：

このような奇怪な現象、寡聞にして聞いた事がない。

常識はずれにもほどがある。

見た所牛頭のデーモンのようであるが、体は痩せつぼちで弱々しくソウルも貧相そのもの。

まるで人間の赤子ではないか。

まさかデーモンの赤子か？まさかこうやつて生まれているとは…：だが見た目で判断するのはまだ早い、鴉人やバモスの親方の例もあるしひつくりしたから取り敢えずは殺すなどという行動をする者などおるまい。

「ワンワン!!うーわおー！（これそなたら、名を名乗ることを許す）」すると此奴ら何を勘違いしたのか驚いて顔を見合させ、一匹がぶもおなる合図とともに粗末な棍棒を持つて我輩に殴りかかるとした。

その棍棒どこから出した？

「バウ！（無礼者！成敗！）」

前足を振るつて貧相なデーモンもどきをそつと撫でると壁にすつ飛んでいった。

騎士たる者、道理の分からぬ愚か者を全力で殴るなどという無体はせぬ。

せいぜいが拳骨で済ませるのが騎士というものだ。

ところが壁に叩きつけられたデーモンはパーンという破裂音とともに弾けて塵と石になつて消えてしまった。
ますますわけが分からぬ、ソウルになつて還元されるならともかくあの血肉を持った質量はどこに行つたのだ？

質量保存の法則は何処に？

すると仲間を殺された？のに激昂したのか訳の分からぬ呻き声を

上げながら残りの連中も棍棒を振りかざして突っ込んできた。

握り、悪し！姿勢、悪し！

ど素人の集団かと、相手になりませぬ。

が、戦さを仕掛けられて黙つて引き退るものなどアノール・ロンドの騎士におらぬ。

無体な無礼・侮辱には死をもつて償わせるのが我らの流儀。警告はしたにも関わらず、連中が蛮勇に任せるというのならば粉碎するのみ。

我輩は一步下がつて十進むの精神で体当たりを仕掛けると進路上のもどきどもが木つ端微塵に吹き飛び塵に帰る。

実に脆弱、このような弱卒に神々の大王グワイン御自らより賜り我が友の名を冠した神剣を振るうなど騎士の名折れ。

無手にてお相手いたそう。

⋮

「ヤベエ…とんでもないのがいるじゃねえか」

17階層、通路の向こうの大広間が随分騒がしいと思つて冒険者の一人はそつと見にきた。

犬の鳴き声に近いが、ヘルハウンドとはまた違つたほえ声。

もしやレアモンスター（大金）!?と思つて来たのが運の尽き。

モンスター、ファイリアに必要なモンスターをティムしに来たガネーシヤファミリアのクエストが発注されてから多くの冒険者が難度こそ討伐より高いものの実入りのいいモンスター捕獲に精を出していった。

このショードレアなモンスターをティムして出品すれば大金が手にはいる

「冗談じやねえ…あんなバケモン死んじまう」

何故か剣を背負つた巨大な狼タイプのモンスターがミノタウロスの集団を瞬く間に蹂躪しているところに出くわすなんて！

モンスター同士が攻撃し合う風景はダンジョン内でも珍しい光景ではない。

変異種の習性ではあるのだが。

「気付くなよ…気付くなよ…」

だがそいつは耳をピクッと動かすとこつちの方に駆けて来た！

Lv4の冒険者は全速力で逃げ出すが、一瞬でモンスターは飛び上がるところつちの上にジャンプして來た。

「ウワアアアアアー！く、来るな！来るなー！」

だがいくら恩恵があるとはいえ人間と巨大な狼では速度が圧倒的に違う。冒険者は命からがらガネーシャファミリアのモンスター捕獲本体と合流し地上戻った。

：

うむ、どうやら驚かせてしまったようだな。

それにしてもこの変なデーモンもどきは退治してやつたというのに大袈裟なやつよ。

ちらつと嗅いだ限りでは鉄と油、それに下のものの嫌な匂いか。まあソウルも小さい無力な民ならばデーモンもどきが跋扈する二ト殿の領域に迷い込んで怯えるのも無理はあるまい。

礼の一つもないのは頂けないが、騎士たるもの見返りを求めぬものよ。

我輩はこのような覚悟で何処かに良い拠点は無いかとそこらへんをうろつく。

うむ？なんだこの石は？デーモンから出たが楔石とは違うな。

我輩は試しに噛み碎いてみるとスースとソウルが流れ込む感覚が身に染みる。

うむ、どうやらこれは石化したソウルのようなものらしい。

不死人たちが殺してでも奪い取つたり死体を漁つて手に入れるとは聞いていたが、まさか食べられるとは知らなかつた。

だが、正直食いでは無いな。

やはり食事はきちんと取らねば。

すると向こうのほうから水と緑と食物の芳しい香りがして來た。

ここでも商売とは、人とは実に商魂逞しいものよ。

我輩はソウル石を加え集めると口に含み、人の商人と交換しようと

考えた。

草とエストとソウルさえあれば百年でも千年でも動ける人とはいえ、人喰いミルドレッドの例もあるように肉も嗜みとして食うのだろう。

だつたか。

まともな食事があることを願うばかりだ。

第2話

我輩は芳しい香りに誘われて階段を降りていく。

するとそこには巨人がおつた。

なるほど、ここでも門番として働いておるのだな。

実にご苦労なことである、よしよし働きが認められグワイン王の覚えめでたければ騎士の従者くらいには叙されるやもしれんぞ。

なんといつても鷹の目ゴーダ殿の例もあることだしな。

「わん！（グワイン王の騎士シフである！お勤めご苦労）」

ところがこやつ門番のくせに誰何も何もなくいきなり訳のわからん喚き声を出して殴りかかって来おつた。

「バウ！（無礼者！手討ちにしてくれるわ！）」

一閃あるのみ、切り捨て御免である。

アノールロンドの法度は厳しいのだ。

しかし生き返つて最初、我輩の狼騎士の剣尖をかくのゴトキ下郎で汚すことになろうとは甚だ不本意であった。

我輩は大事な剣を確かめる。

ふむ、刃には一点の曇りもない。当然だが。

我が剣はアノールロンドにおいて最初の炎（根源）により我が友アルトリウスの剣（神器）を神々の楔石の原盤（神秘）によつて鍛えた物。

一切の魔を断つ神剣、鶏同然の下郎を斬るには過ぎた代物よ。

切り捨てた下男は、デーモンもどき同様にソウル石を残して塵になつた。

あのような無礼者を門番にしようとは、この主人は客をもてなす心構えがなつておらぬな。

尤も、はつきりいつて神都とこんな場末を比べるのが間違いだ。

あの程度の門番では神都どころか場末の酒場の門だつてろくに守れまい。

我輩は更に階段を降りていくとそこには場末の酒場どころか地下にしては素晴らしい光景を目にした。

地下だというのに水と緑が豊かな土地。

うむ、墓守の務めに戻るまではとりあえずはここをキャンプ地とする！

さて、見渡してみると何やら甘い果実の匂いがする。

何と言つてもソウルの取引は危険を伴うのは常識で

やつと取引できる商人と思つたら連續食人鬼で気に入らない客を殺して食つて残りを次の客に食材として出してたとかいうのはかなりましな方らしい。

近づいてみたらきなり大弓で射られたとかソウル魔術で攻撃されたとか猛毒沼に落とされたとか。

とかく碌な話を聞かない。

向こうの水上に見えるのが人間の集落だ、恐らくは外からの攻撃を防ぐために島に集落を作っているのだろう。

しかし、入つてびっくり“病み村”みたいなことになつていたら洒落にならない。

“いらつしやいませ”的看板の隣で人間が串焼きになつてたり患者が毒虫になつている可能性は十分ありうる。

そういえば荒屋が続いている遠目の雰囲気がどことなく似ているな：

陰鬱な病み村のまさに何もかもが地獄の最下層、という雰囲気を思い出した我輩は気分が悪くなり集落から遠ざかつた。

思えば、この森はどこか黒い森の庭に似ているな。

あそこまで暗くは無いが、とりあえずはキャンプ地として適当な広場になりそうな場所を探し

そこを拠点に今後の方針を考えてみればいい。

我輩もいい加減に気持ちが疲れて来た。
とりあえずは食料を漁つたり、湖で汚れを落として数日を過ごした。

この森の中も過ごしてみれば快適さという点では黒森よりもずっと優れている。

尤も相変わらず食事が果物だけというのには飽きてきた。

狩をして食料にしようとしてもこの辺りの獣は皆何故かソウル石を残して消滅してしまう。

時たまに何故か綺麗に毛皮やら爪やらだけが残ることもある。

謎の現象だ、正直不気味である。

森の中で拠点になりそうな場所を探して歩いていると、よく見覚えのある場所に着いた。

正確にいうと似たような場所を嫌という程知っている。

すなわち墓だ。

木製の十字架、突き刺さつた武器、そしてこまめに訪れる者がいるのか手向けの花が備えられ荒れた様子もない。

不死人は死なぬ故に、実に悲しく哀れで惨たらしい。

永久に生きた屍、ソウルに飢えた亡者となつて人を襲いうろつき回る怪物になつた家族や友人を見たいと思う者がいるはずもない…

我輩は尊厳を持つて弔われた人々がいることに安堵した。

まともな人が少なくとも一人はいる証拠ほど安心できるものはない。

ピクと耳を凝らすと誰かが近くまで近づいて来たのを感じて振り返る。

：女性がいる、実に見事な気配の隠し方だ。

キアラン様には遠く及ばぬが、この森の中ここまで近づかれるとは思つていなかつた。

見事な隠密の技だ。

「ウゥウ」

唸り声をあげて威嚇すると、露見した事に気付いて緑衣の女性が姿を表した。

：

『大型のヘルハウンド変異種モンスター…ギルドの注意掲示板にあつた奴か…』

目の前の巨大な狼型モンスターの探知能力は私の想像よりもずっと鋭かつた。

ヘルハウンドにしても探知能力は高いが、私の隠密能力なら先手を取れるはずだつたのに。

いつもなら巨大モンスターとの1on1での正面切つた戦闘は絶対に避ける。

でも、今は絶対に譲れない！あいつはよりもよつて彼女達のお墓の前にいる…

『ここから撃つて当たるか？』

あれだけの大型モンスターを倒すには魔法を最大火力で叩き込むしかない：

だがそれでは皆んなのお墓まで巻き込んでしまう、私はやむなく木刀を抜いて機会を伺う：

するとどうしたことか、巨大ヘルハウンドは突然敵意を向けるのを辞めてこちらをじっと見つめる。

モンスター？でも、それにしては…なんて澄んだ瞳なんだろう。彼？はすると突然踵を返して跳躍し、私の視界の遙かかなたにまで飛んで行つてしまつた。

『何故？わかつてくれた…？まさか…』

私はあの灰色の巨体とその背負つた大剣が水晶の光を浴びてキラキラ輝く様を眺めながら跳んでいく様子をずっと眺めていた。

⋮

目の前の人間？のような生き物の目線と場所から状況はわかつた。

ああ、墓参りか。

親しい人をなくした辛さはよくわかる。

我輩は姿勢を正すと踵を返し、森の奥の方へと跳躍して去る。

誰にも故人を悼む権利はあるだろうに、邪魔をしてすまなかつたな
と思いながら。

第3話

あの後、森の箱庭を抜けて集落へと繰り出した我輩は原住民から弓矢や魔術の歓迎を受けた。

威力からすれば大したことはない、恐らくは技量の粗末な気狂いの住民が粗末な武器で攻撃して来ているのだろう、虫が刺すほどにも感じないが客人に対してもこの扱いはいただけない。

魔法使いにしても見た目こそ派手だが詠唱が長く、避けるのは容易い。

何故鎧もつけていないのか、ひよつとして理力に全振りで体力がないのか？

あれでは詠唱が終わるまでに10回は死んでいるだろう。

本気の攻撃だつたら槍のごとき竜狩りの太矢が飛んで来るはずだ。しかし人と違つて盾を装備できない我輩ではスタミナと引き換えにダメージカットができるので避けて対応するしかない。

実際に鬱陶しい、ちょっと行つて注意してやろう。

全く、我輩も猫やキノコのように人間の言葉をさせたらこんな苦労はしないのだが。

⋮

リヴィラの街

ダンジョン18階層の安全地帯に作られた冒険者の街。

しかしながらモンスターの襲撃が皆無というわけでもなく今の街は333代目らしい。

街並みの粗雑さに比べてそんなに大層な歴史があるとも思えないが、

まめに記録しているかはたまたサバを読んだ箇付けか、多分後者だろう。

今、この街にまたまた大型モンスターが襲来しつつあつた。

「来たぞー！ギガントハウンドだー！」

ギガントハウンドとは巨大なヘルハウンドに冒険者が自然とつけ

た名前。

でかいヘルハウンド？ならギガントハウンドでいいだろ、とはなんとも単純な命名だが自分のペツトでもあるまいしそのうち殺すつもりだしこれでいいのだろう。

「撃て撃て！近寄らせるな！」

代表のボールズが声を枯らして街に近寄らせまいと冒険者達の中の弓手や魔法使いに命じて応戦させる。

「畜生！はええ！」

「魔法が当たらない！誰か、あいつの足を止めて！」

弓矢や魔法による攻撃が当たらない、モンスターの中には機動力重視のものもいるが

今リヴィラの街を襲っているモンスターの機動力はゴライオスに匹敵するその巨体にも関わらずケタ違いだった。

ある不死人はこう言つた

『当たるまで近づけ、当たらないなら方法を変えろ』

またある者は

『死んで覚えろ、勝てるまで死ねば勝てる』

全ての攻撃をひらりひらりと巨大な鉤を絞らせずに回避する。

（くそっ！強化種どころかまさかモンスター・レックスかよ！）

だが避けていただけのモンスターはちよつと距離を取ると次の瞬間にはついに一瞬で間を詰めて

街の外壁をいとも容易く破壊すると櫓の上に陣取つていた冒険者が倒れる櫓から振り落とされる。すかさず冒険者の中でも前衛が出てジャイアントハウンドを防ごうとするも、そのスピードは早く瞬時に後衛の魔法使いたちが蹂躪される。

「くそお！俺の店があ！」

ジャイアントハウンドの暴れぶりは凄まじく、ここに

リヴィラの街は壊滅した：特に一等地にあつた顔役の家は入りやすいところにあつたのが災いしたのか跡形もなく破壊された。

正確にいうと、原因は冒険者の攻撃の流れ弾による延焼でありジャイアントハウンドはそこいらをおちよくるように飛び回つていただ

けだった。

なお、その午後には新しい街が早くも再建された。

数日後：

「で、こいつが今噂の変異種つてわけね」
「大きい…それに早い…」

「つていうかこの剣でか！何？レアアイテム？」

ロキ・ファミリアの冒険者たちは今日、掲示板に張り出された緊急クエスト・変異種 ジヤイアントハウンドの討伐依頼の前に集まつた冒険者達の人混みの後ろで依頼を見ていた。

『17階層に出現した大型の変異種モンスター
階層主のゴライオスを食い殺した事からLv5相当と推定されます

リヴィラの街が襲撃され壊滅した際の戦闘から極めて素早い接近戦型という情報があります

また、背負った大剣はかなりのレアアイテムと推定されます

現在、18階層から更に下層に潜伏していると推定

討伐時にはリヴィラ共同組合より特別報奨金が支払われます』

「いいなーこの剣、かつこいいじやん！ねえねえ！今度みんなを誘つて討伐に行こうよ！」

「ティオナ、あんたこの前『ウルガ』壊したばっかでしょ」「早くて…大きい…スピードタイプ…いける？」

「あ、アイズさんが行くのなら私も行きます！」
だが何と言つても注目の的は背負ったドロップアイテム扱いのアルトリウスの大剣だつた。

まさかシフも自分の背中の友の形見を狙う人間がここまで多いとは予想だにしていなかつたろう。レアアイテムを背負つたレアモンスターの話でギルドは持ちきりだつた。

蒼く輝く巨大な魔剣、巣廻目に見ても数億ヴァリスの価値があるという事から多くの大手戦闘系ファミリアが討伐隊を編成することになる。

Lv5相当なら中堅ギルドがいくつかLv4か3の冒険者を出し

合つて連携すれば決して倒せない相手ではない。

それでいて期待される報酬は素材ではなくアイテムそのものだから莫大だ。

経営も一挙に楽になるし、勧誘の広告塔にもなる。

いかに変異種とはいえ17階層程度なら2戦級冒険者以上なら脅威ではないというのが判断であつた。

「おい、見ろよ。激レアアイテムだつてさ！」

「まじかよ、これミスリルの魔剣じやないかって？いくらするんだよ？」

「おい、早く団長に報告してこいよ！早いもん勝ちだろ！」

掲示板を見た冒険者達が次々と駆けていく。

「アイズー！早く早く！急がないと先越されちゃうよ!?」

「待つてよ、今からいきなり中層以上に潜つて捜索となつたらこっちも団長の指示がないと」

第4話

シフは見知らぬ洞窟（ダンジョン）の中を歩きながら考えた。

（彼らは…亡者ではなかつた）

日が陰り、ダークリングの表れた人間は不死となる。

あまりにも悍ましい常識。

光と闇がぶつかりあれば日は陰り、闇のみが残る。

だが闇から光を求めて全ての生命が生ずるのもまた真理である。皮肉なことに、グウイン王ですら光を最初の火から見出して闇から出た存在である。

（彼らの存在は、闇ではない…むしろ光…神族に近い）

奇妙に彼らの存在は光と闇が入り混じっている。

だからこそこの闇の領域でも彼らは活動できるのやもしけない。（尤も、ソウルの量という点から見ればあまりにも脆弱だが）

活動中のモンスターをことごとく粉碎していたが、連中のソウルはシフが生きていた昔に比べれば微々たるものである。

ソウル石にしてもそこから得られるソウルの量は極めて弱い、いやどちらかというと薄い。

尤も、その薄さが幸いしてなのかもしれない、

あの人の間達がまだ不死では無いのは、

火が陰る、最初の火が弱まる。

火にソウルを注ぎ、燃やし続けるためには高純度のソウルを必要とする。

火の陰りは暗闇を、暗闇は淀みを、淀みは深淵を、深淵が人を不死の存在へと引き戻す。

淀みとは、ソウルが流れず溜まつていくことである。

淀んだソウルは火の陰りゆえであり、同時に火にくべられる薪とともになる。

貴公…貴公らが狩っているのは…人間だよ…彼らは皆…人間なのだ。

闇の中では人は光による定型を失い、ソウルのあるがままに定型される。

どこまで本当か、そもそも正しいのかはわからないが人間は何でもありうる。

人は不死になり、闇の卵となり、蛹となり、蝶となつて羽ばたいていった。

いつかは人間性という鱗をまとつた竜になるだろう。

遙か未来、暗く、冷たく、優しい世界。

闇しか無い世界にいるのは竜となつた人間ばかり：

そこに少女が灰で火を描くと闇から小人達が出てきて懐かしい匂いのするソウルを見出す。

神話の再現、あるいは遙か上古は環になつた未来だつたのか。そんな夢を見た気がした。

それだとうのにシフが見た人間はほとんど皆同じであつた。

そして人間たちが呼んでいたモンスター・デーモンとも人とも違う存在。

(わからぬことだらけだ、我輩はどうすればいい?)

最早、墓はなく神々は去り騎士は不要なのだろうか?

「グルルルル（なんだ貴様は…そこをどけ!）」

彼が迷宮ダンジョンを歩いていると、迷宮の王とも呼ばれ上級冒険者のパーティですらあつさりと殲滅する巨大な骸骨のモンスター、ウダイオスと接触してしまつた。

モンスターには理性も知性も存在しないとはシフも理解できていた。

こいつもは哀れにも炎に向かう蛾のようにソウルを求めて破壊を続けるだけの存在でしかない。

「ガウ!（言葉を解する気もないか…我輩に剣を向ける意味はわかるな?）」

迷宮の王ウダイオスが剣を構えようと地面から生えた天然武器の

大剣に手をかけた瞬間：

シフは瞬時に目の前の敵を見据え、すかさず抜剣の勢いもそのままに空中で剣を加えながら突進。

首、頸、全身の筋肉をバネとした体そのものを巨大な一振りの剣とかす戦技、狼騎士の剣技を持つて上空からの渾身の一撃を加えた。

ウダイオスはすかさず取り出した剣を掲げて防御の姿勢を取った。

その巨体にして咄嗟の判断は生まれたてであつても強者のそれであつた。

惜しむらくは、ウダイオスは若すぎた。

もしも彼が自分よりも弱者である冒険者相手ではなく

深淵の主やデーモンの王といった圧倒的で絶望的な敵との経験を積んでいたら単純に受け止めるではなく剣を逸らすか身をひねつて回避するという選択肢を選んだであろう。

それほどまでに強烈な一撃をシフは加えた。

それはまさに、かの狼騎士が放ってきた必殺の一撃であった。

アルトリウスの大剣が、ウダイオスの黒い剣とから合うこともなくまるで紙のようにあつさりと切り裂く。

『バウ！（一撃！アノール・ロンドの騎士に二の太刀は不要！）』

それでウダイオスは剣も骨もするりと頂点から断たれ真っ二つにされた。

ウダイオスの特殊能力である、地面からの棘攻撃も防御体制も間に合わない完全な先手を取つての一撃必殺。

多くの不死人の心を葬つてきた強烈な一撃は今もなお受け継がれています。

（なんだこいつらは…まるで悍ましいはずなのにソウルはまるで生まれたてだ。

巨大な洞窟、湧き出る異形、突然生まれ変わった我輩、奇妙な人間たち…）

シフは踵を返した、まずは人間の謎を解かねばならない。

この洞窟の奥に何があるのかを知ることも重要だが、今は先にできることから解決しようとした。もしも、冒険者が彼の実力を知つてい

たら。

もしも、話ができたら。

もしも、シフの大剣に価値が無かつたら。

あるいは悲劇も回避できたかも知れない。

しかしダンジョンでは人間以外はモンスターであり、モンスターは人類の敵でしかない。

結果として、かつての“あの不死人”とシフとの再開の時の過ちが繰り返されることになる。

⋮

(人間というものは不死身だろうが定命だろうが、いつの時代も変わらんものだな)

人間と接触しようとしたシフに向けられたのはその身におびる大剣への欲望。

正確には大剣を売つて得られるだろう

だがこれはモンスターと人間との関係もある。

人間から見ればモンスターは人類の敵だが、同様のことは相手からも言える。

「う……わあああああ！」

「くっ、ファイアボーザー！」

「畜生！早すぎる……がフウ！」

獣の力と人間の技の組み合わせほど恐ろしいものはない。

しかしシフは手加減をした、剣士としてはあるまじきことだが峰打ちで済ませた。

具体的には剣の腹で持つて打ち据えるだけだが、長さが8mにも達する巨大な剣で殴られれば冒険者といえども重症は免れない。

(お前達は所詮は死ねる定命者。

亡者ならいざ知らず、ここで無駄に死ぬことはあるまい

我が友の剣を盗人のごとく狙つたことは無知ゆえの強欲ゆえ大目に見てやろう）

そう言うと、彼は更に奥深くへと足を進めて行く。